第61回全国女性集会に参加して in 長崎

前日は、平和研修のため平和公園等を「長崎さるく（SARUKU）」の方のガイドサポーターの案内で勉強した。まず最初に話された「今回の熊本地震は自然災害であるが原爆は人災である」と言う言葉が重かった。そして、韓国の方も7万人もの方が、長崎の地に居て被害に遭われたという。累計168，707人の方が死亡されている。ガラスが溶ける温度は1，100℃で、原爆投下時の温度が3～4，000℃、440m／秒速の暴風であったと。遺体も何も残っていない方もたくさんいらっしゃるということだった。

第1日目の全体集会では予定の日程スケジュールの他、熊本県連、大分県連の被害状況等の報告もあった。現在の家に住めなくなり、子どもさんの所に転居される方や、地震で亡くなられた仲間のことを話してくれた。最後に、組坂執行委員長が現在の鳥取ループに対しての取り組み状況、部落差別の法制定中央集会実施について報告があった。

一瞬にして消えた生活がガラスのむこうにみえる

2日目は第6分科会の〝女性差別撤廃にむけた取り組みと反差別共同闘争の課題（女性差別について考えよう）〟に参加。東京都連の「沖縄の島ぐるみのたたかいに連帯して」と、兵庫県連の「2009年兵庫県被差別部落女性の実態調査再分析に取り組んで」の2本の報告があった。フロアからも活発な質問・意見があった。連帯というところでは部落解放運動との関連づけについてどう考えるかとの意見もあった。兵庫の方が「自分の核は解放運動、その芯がぶれなければ良いのでは」と言われていたが、私も同じ考え方である。連帯をしていくことは大事であるが、自分たちの運動の本質をきちんと考えておきたいと思った。

（芦原支部・山本昌代）

とん挫した県教委交渉 第3次交渉 再開

2月12日、教育委員会第3次交渉が県民文化会館3階の特別会議室でおこなわれ、教育文化運動部、県連執行委員、各支部の代表が参加した。

この第3次交渉は、各部局の統一要求であった「障害者差別解消法」において、県教育委員会が具体的なとりくみ計画をまったくおこなっていないことで第2次交渉がとん挫したため、第3次交渉となった。交渉の冒頭、障がい児を地元学校に受け入れる準備をすすめる、障がい児の就学が当然のように支援学校であるかのような風潮を払しょくするとの回答がされ、教育にかかわる交渉がスタートした。

部落の子どもたちの就学を保障する就学支援事業においては、各種就学支援事業の手つづきの簡素化と申請漏れのないとりくみの強化、就学支援事業の充実が回答された。参加者から、そもそも、奨学金は給付型であるべき、卒業後に負債を背負わせない制度であるべきなどにあわせ、学校行事としておこなわれているクラブ活動や課外事業における個人負担の軽減や補助制度の必要性などが指摘され、県教委としてとりくんでいくとの回答を得た。

さらに、進路保障についての要求では、一部地域に集中する県内学区廃止の問題、部落の子どもたちの受け皿である学校における募集定員の問題、就職差別の問題などを指摘し、県教委をはじめ各教育現場のとりくみ強化を求めてきた。

また、部落の子どもたちを支えている学習支援推進教員（加配教員）の配置や活動の課題、来年度における加配教員の推移などを指摘し、全体の加配数においては、交渉当日（今日）に担当者が文部科学省に陳情しているが、現時点では具体的な数字が示されていないとの回答にとどまった。

最後に、子どもの貧困問題についての交渉がおこなわれ、部落の子どもたちを取り巻く状況として、親の就労状況や家庭環境における問題と子どもたちを取り巻く実態把握をもとに具体的な施策をすすめる必要性を指摘し、県教委や各教育現場のとりくみ強化をすすめるという回答で第3次交渉を終えた。しかし、県教委への統一要求はまだ残されており、県連教育文化運動部で、引きつづき交渉をすすめることが確認された。

和歌山からの参加者のようす

連載（6）よき日のために

いたずらに社会に向かって呟くことをふくめて、われわれの解放は、われわれは世間のいわゆる同情家の―同情はする、しかしなんじの僻みと不衛生な生活から脱けてこい―というごとき遁辞には耳をかすものではない。それは、プロキュストの鉄の寝床だ。旅人のからだが、そのベッドより短い時は、ひきのばす、長すぎた時は切りとってしまうのだ。彼はとうてい助けるものではない。また彼らのあるものは、日本のネズダーノフだ。おせっかいな、おめでたい、ロマンチック・リアリストだ。そんなものに、いつまでも、相手になっていては、いけない。われらのなかへ―というのを、われらのなかより―と改めねばならぬ。

われらのなかより―よき日の殉教者よ、出でよ。

運命

われわれは、運命を呟くことはいらない。運命は、われわれに努力を惜しませるものではない。成就しなければならない大きな任務をもった今日のごとき時代は、幸福である。かくて、栄光の疲労の重さの下に倒れる人は幸福である。かくて、倒れる方が空虚な倦厭のなかに倒れたり、他人のために仕事を悲しげに見まもったりするよりは、よいではないか。

諦めの運命より闘争の運命を自覚せよ。

あらゆる苦難のある闘争のほうが、いわゆる美しい死よりもよいではないか。それにわれわれが、なんら潑剌な自発的社会運動を起こし得ないのは、社会生活に無感覚であるためか。無感覚は死の仮面だ。それなれば、いっさい黙っているがいい。ゴーリキーがいっている―呟いたり不平をいったりして、それが何になる。破れるまで、仆れるまで、生きて生きて生き続けよ。そして、すでに破れているのならば、黙って死を待っていろ。全世界の智識はただこれだけだ。わかったかね。

われわれの運命は、生きねばならぬ運命だ。親鸞の弟子なる宗教家？によって誤られたる運命の凝視、あるいは諦観は、われわれ親鸞の同行によって正されねばならない。すなわち、それはわれわれが悲嘆と苦悩に疲れはてて茫然していることではなく―終わりまで待つものは救われるべし―といったナザレのイエスの心もちに生きることだ。そしてそれは、われわれに開かれるまで叩かねばならぬことを覚悟させるものだ。

（次号につづく）